

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名：国際収支(2006年1月)

発表日：2006年3月13日(月)

～下振れも一時的。経常黒字は緩やかな増加傾向～

(No. J - 256)

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 副主任エコノミスト 新家 義貴

TEL : 03-5221-4528

		原数値 経常収支				季調値 経常収支			
		前年比	貿易・サービス収支		所得収支	前期比	貿易・サービス収支		所得収支
			前年比	前年比	貿易収支		前期比	前期比	貿易収支
					前年比				前年比
04	1-3月期	43.2	82.9	42.3	9.9	9.5	8.6	2.8	6.7
	4-6月期	20.3	25.3	32.8	13.1	0.6	▲ 4.4	▲ 0.4	8.2
	7-9月期	6.7	10.7	10.5	3.7	▲ 2.2	▲ 2.4	▲ 5.5	0.6
	10-12月期	6.4	▲ 7.2	▲ 9.3	25.6	▲ 3.5	▲ 12.1	▲ 9.7	5.9
05	1-3月期	▲ 8.1	▲ 23.0	▲ 21.4	14.5	0.0	4.9	2.8	▲ 0.2
	4-6月期	▲ 9.8	▲ 30.4	▲ 29.7	18.4	▲ 4.6	▲ 29.1	▲ 24.4	14.5
	7-9月期	▲ 1.5	▲ 35.2	▲ 31.7	28.5	3.0	▲ 5.1	▲ 6.6	4.9
	10-12月期	8.6	▲ 12.1	▲ 18.1	29.0	15.4	25.6	11.3	10.4
05	1月	▲ 27.9	▲ 105.7	▲ 47.5	12.4	▲ 6.7	▲ 0.6	7.5	0.6
	2月	▲ 3.3	▲ 17.4	▲ 20.6	18.6	5.0	▲ 5.0	▲ 11.1	1.7
	3月	▲ 2.1	▲ 6.7	▲ 9.8	12.4	▲ 17.1	▲ 11.5	▲ 5.3	▲ 13.4
	4月	3.9	▲ 2.4	▲ 7.1	15.2	1.9	▲ 31.1	▲ 20.0	28.1
	5月	▲ 18.6	▲ 63.5	▲ 60.8	27.6	1.5	7.9	▲ 7.8	▲ 3.2
	6月	▲ 14.6	▲ 22.4	▲ 24.4	3.5	10.7	23.7	23.6	0.7
	7月	3.2	▲ 20.2	▲ 21.8	24.2	▲ 6.2	▲ 19.2	▲ 14.5	2.0
	8月	▲ 16.1	▲ 93.3	▲ 69.4	28.1	0.2	0.9	▲ 2.2	1.7
	9月	6.1	▲ 19.3	▲ 20.8	33.7	6.1	▲ 1.2	▲ 2.5	7.1
	10月	2.6	▲ 27.3	▲ 29.2	44.0	1.3	4.9	▲ 4.2	2.5
	11月	15.1	11.4	0.3	11.2	0.5	16.9	26.5	▲ 9.7
	12月	8.6	▲ 11.0	▲ 16.7	38.1	27.4	23.3	3.2	29.6
06	1月	▲ 7.5	赤字	赤字	33.6	▲ 24.4	▲ 40.1	▲ 31.1	▲ 10.3

(出所)財務省「国際収支状況」

○ 下振れも一時的。経常黒字は緩やかな増加傾向

1月の経常黒字額は前年比▲7.6%の7,191億円(原数値)と、事前の市場予想(コンセンサス6,543億円、前年比▲15.9%、レンジ900~8,600億円)は若干上回ったものの、5ヶ月ぶりの前年割れとなった。

今月黒字額が縮小した最大の要因は、貿易収支が▲2,094億円の赤字になったことである。所得収支黒字に関しては、①海外日系子会社の業績が好調なことから配当金や再投資収益が増加していること、②対外資産残高の拡大を背景として証券投資収益も大幅な増加となっていること、などから前年比+33.6%と引き続き大幅に増加し、経常黒字の下支え要因になっているのだが、今月に関しては貿易収支の赤字転化の影響が大きく、カバーしきれなかった。

だが、今月の結果は特に懸念すべきものではないだろう。貿易収支が赤字転化した最大の要因は、原油価格高止まりの影響で輸入金額が前年比+28.1%と大幅に増加していることであり、輸出が悪化したためではない。また、1月は例年、正月休みの影響により原数値でみた貿易黒字の水準が低く、比較的赤字になりやすい月でもあるので、今月の赤字転化を深刻に受け止める必要はないだろう。国内景気に与える影響をみる

上でより重要である輸出に関しては同+13.1%と引き続き堅調に推移しており、むしろ良好な内容と判断できる。

貿易黒字の先行きについても特に心配する必要はなさそうだ。まず輸出に関しては、足元で改善傾向を明確化にしており、当面大きな懸念材料はない。また、輸入に関しては、今後も高水準での推移が続くと予想されるが、原油価格のさらなる急上昇といった事態を想定しなければ、伸び率で見ると徐々に鈍化してくるだろう。したがって、貿易黒字は振れを伴いながらも緩やかに持ち直してくると予想される。

以上の通り、所得収支黒字の拡大傾向には変化がみられないなか、貿易黒字も持ち直してくることから、今後も経常黒字は緩やかに増加していくと考えられる。

